

歯学部における 社会系科目の教育

大澤 航介

東京歯科大学社会歯科学講座 助教

私は大学院卒業後の2020年4月、母校である東京歯科大学社会歯科学講座に助教として着任した。時はまさにコロナ禍の真っ盛りであり、教員としての最初の仕事はオンライン講義の環境準備から始まった。教員としては右も左もわからない中でのオンライン講義の準備は、とても苦労したことが記憶に新しい。

さて、私が教育を実践する学生は、歯学部・歯学科の学生（以下、歯学部生）である。学生全員の最終的な目標は歯科医師国家試験に合格し、歯科医師となることであり、その多くが将来は臨床家として患者の歯科治療にあたることになる。そのような学修者に対し、私は主に社会歯科学や医療倫理学、コミュニケーション学などの講義・実習を担当しているが、ここでは主に社会歯科学の講義について記述する。

社会歯科学とは、歯学部生が学修するカリキュラムにおける基礎系・臨床系・社会系のうち社会系に分類される科目であり、医事法制や社会保障制度など、基本的には座学中心で学修する科目である。前述の通り、多くの学生が将来的には臨床の道に進むこととなるため、学生としては興味を持ちにくい科目の一つであるだろう。かくいう私も学生の頃は臨床系の科目のほうが興味を持ちやすく、自然と学修意欲が湧いたものである。

そのような環境において、私が講義を行う際に最も意識していることは、「今学修している内容が、歯科医師となった時の自分自身にいかにか当てはまるものであるのか」ということを学生に意識してもらうことである。学生が講義を受講するうえで、学んでいる内容が単に試験合格のために必要な知識であるという認識ではなく、いかに歯科医師としての実践の場で活きる知識であるかを意識してもらえるように講義を行うことを心掛けていく。例えば、医事法制の一つである歯科医師法の講義においては、単純に法律の内容や重要事項を説明するだけではなかなか学生の学修意欲は湧いてこないため、知識の定着にもつながりにくい。そこで、今現在学んでいる知識が歯科医師とし

て働く場面でのように生きてくるかということ、自身の経験や実際の臨床現場での事例を用いて説明することで、興味を抱いてもらいやすくなり、知識の定着につながりやすくなると考える。学生自身が思い浮かべる歯科医師としての将来像に、学修している知識が活かしていることを認識してもらえば、歯学部生は興味を持ちやすいのである。そのためには私自身の臨床経験はもちろん重要であり、社会系の教員となった今も臨床を継続して行っている。また、様々な歯科関連のニュースを調べたり、臨床家の先生と会話をしたりすることで、講義に活かせる情報を日々収集している。

その他で意識していることとしては、双方向性の確保である。私の担当する学生に限った話ではないと思われるが、学生は実習形式の講義では能動的に学修できる学生が多いものの、座学形式ではどうしても受動的になってしまう学生が多い。そのため、双方向性を意識した講義を行うためにも、毎時間プレテスト・ポストテストの実施やディスカッションの時間を取り入れるようにしている。オンライン講義が中心の時期はこの辺りの時間の確保にも苦戦したが、Google Formsの導入や日々進化するZoomの

機能を用いることで概ね解決することができた。昨今のデジタルツールの進化には驚きとともに感謝することが多いが、適切に使いこなして教育に活かせるように自身も日々学んでいかなければならないと感じている。

早いもので教員となって今年度で4年目を迎える。着任当初と比べると、様々なことに慣れてきたと実感しているが、慣れにより成長が止まってしまうことは避けなければならない。教育の進化に終わりはないということが私の考えであり、私自身が現状に満足してしまつては学生により良い教育をもたらすことはできない。幸いなことに、私の勤務する東京歯科大学は教育に熱心な教員が多く在籍し、講座内はもちろん、講座の垣根を越えて常に様々なことを相談できる環境が整っている。私一人ではいくら考えても出てくるアイデアや手法には限界があるが、大学が一体となって教育に力を注いでいるため、常に周りの教員と教育手法やアイデアをディスカッションし、アップデートできることは非常にありがたい環境であると感じている。この恵まれた環境に感謝するとともに、常に学生に少しでも良い教育を実践できるように、これからも日々精進して参りたい。

東洋大学福祉社会デザイン学部 ・ 水村 容子「福祉社会デザイン学部学部長」

団地をキャンパスに新たな学びを創造する

はじめに

東洋大学福祉社会デザイン学部は、その前身であるライフデザイン学部での教育・研究をさらに発展させるべく、2023年4月、東洋大学赤羽台キャンパスに設立された新しい学部である。この新しい学部の3学科における教育内容や研究対象は、文字通り「人とその生活」であり、新しい社会の構築に貢献できる人材の育成を目指している。キャンパスが隣接するUR都市機構ヌーヴェル赤羽台(旧称・赤羽台団地)は、1960年代の高度経済成長期に供給が開始された戦後を代表する団地である。2006〜24年に建て替えによる団地再生が進められる

中で、住民の高齢化への対応や子育て支援、コミュニティ再構築の必要性などの課題が生じている。福祉社会デザイン学部では、こうしたキャンパス周辺の地域課題へ教育・研究を通じて貢献していくことにより、新たな学びの創造を目指している。

1 3学科の学び

福祉社会デザイン学部を構成する学科は、「社会福祉学科」「子ども支援学科」「人間環境デザイン学科」の3学科である。ここではそれぞれの学科の概要を紹介する。

「社会福祉学科」は社会福祉学を基礎とし、誰でもその人らしく生活できる共生社会実現に貢献するとともに

に、国内外のさまざまな課題に対峙できるグローバルな人材の育成を目的としている。それと同時に、福祉ビジネスなどの分野で新たな事業展開を担える人材の育成も目指している。「子ども支援学科」は、子どもと子育てを支援、地域社会づくりに貢献する専門性の獲得や、分野横断型教育を通じた子どもに関わる社会的課題の把握力・解決力の獲得を目標に教育を展開する。特に、多文化共生社会における保育の課題や、保育現場におけるICTの活用などについても学べるカリキュラムが用意されている。「人間環境デザイン学科」では、建築、生活機器、プロダクトなど生活に関わるあらゆる環境におけるユニバーサルデザインについて、ものづくりを通じて学ぶ。デザインの知識や技術を身に付けるとともに「全ての人に使いやすい環境」をデザインするため、人の営みを総合的に捉える視点を養うことを教育の目的とする学科である。

2 新たな学びの特徴

いずれの学科も実務家教育の側面を持つ教育内容であり、カリキュラムには「社会福祉学科」と「子ども支援学

科」は福祉施設や児童施設での現場実習が、「人間環境デザイン学科」では空間やプロダクトデザインに関するデザイン演習が位置付けられている。新しく開設された赤羽台キャンパスには、こうした実践的な教育を受け止める介護実習室、調理実習室、保育実習室、デザイン制作のための実験工房などが整備されており、少人数かつ対話・議論を重視した授業運営のための環境が整備されている。

また、本稿のタイトルにある通り、キャンパスの立地を生かし、「団地がキャンパス」というキャッチフレーズの下、学生と地域社会をつなぐ新しいタイプの教育展開を目指した「赤羽台LDL(Life Design Laboratory)」という活動も展開している。子どもの居場所づくりやコミュニティカフェ運営など、地域のイベントや施設に教員・学生協働で参画し、地域課題の把握とその解決へ向けた活動を展開している。

このような教育・研究体制の下、実社会に対する深い洞察力・理解を持つと同時に、自分自身の専門性に誇りを持つ専門家の育成を目指している。